59. 詩　吟

学生のとき詩吟部に入っていた。習っていた流派は鶴城流で、当時の免状（雅号も貰った）をまだ持っていた。半世紀以上も昔のことになる。電子工学の専攻だったので理論の勉強とは違うものをクラブ活動に求めていた。詩吟部に入部したのは、歴史好きだったことや、俳句や短歌が割かし好きだったこと、それに小学生のころ読んだ漫画に、主人公が両腕を組みながら「べんせい　しゅくしゅく～」とうたって（吟行して）いた場面があったのを覚えていたこと、などが影響したのかも知れない。

練習は昼休みや放課後に、古ぼけた部室の前でテニスコートを見ながら、仲間と一緒に「あ～え～い～お～う～」と発声練習の蛮声を張り上げていた。とは言え、初めから思ったように声が出る訳ではなく、少しは苦労した。なるべく低い音を腹の底から（複式呼吸で）出すようにしないと息が続かないのが経験からわかった。何故「あえいおう」という順番なのか、先輩は説明してくれなかったが、練習しているうちに、発声がスムーズになるからと納得した。事実、口の開き具合の順番でもあるようだ。その詩吟部も、現役の後輩から「入部者が少なく廃部になりそうだ」と窮状を訴える手紙が届いたのは 20 年以上昔のことだ。結局廃部になってしまった。蛮カラ風で、少し野暮ったいのが時代に合わなくなったということか。残念だ。

当時使用していた小型本『和漢名詩選』が捨てられず辛うじて残っている。大きさは 13 × 9 ㎝と小型だが 330 頁程ある。緒言の最後に「日本吟友会」とあるが、奥付は破れて無くなっていていつ頃発行したものかわからなくなってしまった。詩吟愛好家用の本で、絶句（ぜっく）が主体だが、面白いことに今様や和歌も掲載されている。白紙の個所には書き込んだ詩も幾つかある。

この『和漢名詩選』を見ると当時のことが色々と浮かんでくる。最初に習ったと思われる「偶成（少年老いやすく）」を始めとして、懐かしい漢詩が沢山思い出される。目次から幾つか拾うと、「噫（ああ）八甲田山」「太田道灌」「金州城下の作」「桂林荘雑詠」「暁行（ぎょうこう）」「九月十日」「西郷南洲翁を弔う」「静夜思」「壇の浦に泊す」「富士山」「壁に題す」「名槍日本号」「田原坂」などなどだ。だが、ほとんどの詩は忘れてしまい、吟じることもなく今まで過ごしてしまった。

一番好きだったのは上杉謙信の七言絶句「九月十三夜陣中の作」だった。今でも吟じる。気宇壮大な漢詩で、詩吟愛好家の中でも人気の詩だと思う。天正 5 年(1577)に能登平定に出陣した謙信が七尾城を攻略した際、九月十三夜の名月を賞（め）で宴を開き自ら吟じたといわれるもので、次のようなものだ。

霜は軍営に満ちて秋気清し
数行の過雁月三更
越山併せ得たり能州の景
遮莫(さもあらばあれ)家郷遠征を憶（おも）う

私は仲間の内でも詩吟は下手な方だったが、卒業まで続いたのは肌に合っていたからだろう。詩吟のうまさでいえば１年先輩にＳさんがいて、李白の「峨眉山月の歌」などを聞くと感激し、涙が自然と出てきたのを思い出す。美声で情緒豊かな吟詠が心の琴線に触れるような想いだった。テープに録音していたが、卒業記念に後輩から贈られた盃と共に、何回も引っ越しをして

いる内に失(な)くしてしまった。あるとき失くしたことに気が付いて非常にガッカリしたのも、既に思い出になってしまった。そして、同年にも後輩にもうまい人が結構いて、中には大勢の弟子をもって活躍している人もいると聞いたことがある。

就職して、職場の歓迎会で頼山陽の「川中島(不識庵機山を撃つの図に題す)」を吟じたことがある。冒頭の「べんせい　しゅくしゅく～」だ。今から思えば赤面の至りだが、詩吟のお蔭で名前を覚えてもらったこともあると思うと、「役立った」のかも知れない。それからも職場の宴会や結婚式などで何回も吟じたが、35 歳頃本社勤務になってからは人前では吟じなくなった。密かな楽しみは飲んで帰るときは、駅から家まで自転車に乗りながら必ず九月十三夜の「霜は軍営に満ちて･･･」から始め、気分良く幾つかの詩を呻(うな)りながら帰った。これは定年まで続いた。が、不幸にも次第に自己流になってしまったのは止むを得ないことでもあった。

定年から 10 年も経ち、朝の散歩が日課になると、公園で人のいないのを確認しながら次第に吟じるようになった。最近は少し図々しくなり、少人数なら構わず吟じるようになり、思わぬ人から誉められることもあるが、いつも同じ詩を吟じるようになってしまった。発声練習から始め、最初は「九月十三夜陣中の作」、次は「「川中島」、その次は「白虎隊」、最後は「本能寺」だ。全て有名な戦いだ。「本能寺」は他の詩と比べて倍程の長詩だが、吟じ方も工夫の必要な面白い好きな詩だ。

最近はプロの吟詠家や歌謡歌手が曲の中で吟じる CD を聞くようになった。吟詠家は別とすると、いいと思う歌謡歌手は古くなるが三橋美智也ぐらいしかいない。「男涙の子守唄」の中の「棄児行(きじこう)」の詩吟は抜群だと思う。

取り留めのないことを書いて来たが、昔を思い出し、吟じる詩のレパートリーを少し増やしたいと思っている。

川中島　　頼山陽

（不識庵機山を撃つの図に題す）

鞭声粛々夜河を過(わた)る
暁に見る千兵の大牙を擁するを
遺恨十年一剣を磨く
流星光底長蛇を逸す

本能寺　　頼山陽

本能寺溝幾尺(せき)ぞ
吾れ大事を就(な)すは今夕にあり
茭粽(こうそう)手に在り茭を併せて食(くろ)う
四簷(しえん)の梅雨天墨の如し
老の坂西に去れば備中の道
鞭を揚げて 東(ひんがし) 指せば天猶早し
吾が敵は正に本能寺に在り
敵は備中にもあり汝よく備えよ
汝よく備えよ

白虎隊　　佐原盛純

南鶴ケ城を望めば砲煙あがる
痛哭涙をのんで且彷徨す
宗社亡びて我事おわる
十有九人屠腹(とふく)して斃る

棄児行(きじこう)　　雲井竜雄

斯(この)身飢(う)ゆれば斯児(このこ)育たず
斯児(このこ)棄てざれば斯身(このう)飢ゆ
捨つるが是か捨てざるが非か
人間の恩愛斯(この)心に迷う
哀愛禁ぜず無情の 涙(なんだ)
復児面(またじめん)を弄(ろう)して苦(くし)思多し

（2021 年 10 月 1 日）